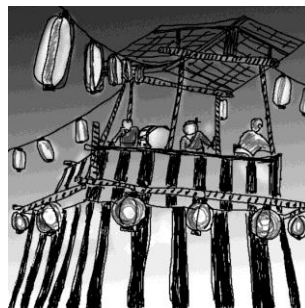


定期券紛失の 注意信号



え・古屋智子

八月のテーマ

金銭は生きもの

倫

理経営では、物や金銭はそれを扱う人の思いが反映するという見方をします。Mさんは、そのことを体験した一人です。

Mさんが勤める会社で、大きなイベントが企画された時のこと。Mさんは、同僚の受け持ちに倍する仕事を任されたことに、不満を持ちながら働いていました。

すると、仕事に必要な道具を次々に失っていったのです。最初は、携帯電話。次に数万円分の定期券。不安に駆られたMさんが倫理指導を受けたところ、「次に無くなるのは何かわかりますか」と意外なことを問われました。

答えあぐねていたMさんに、指導者が一言、「このままでは仕事を失ってしまいますよ」と指摘したのです。仕事を嫌っていることをズバリと見抜かれたのでした。

Mさんはその日から気持ちを切り替えて仕事に向かいました。するとイベントも成功し、不思議なことに、紛失したはずの定期券が見つかったのだといいます。

「金銭は人の心に敏感に反応する」。

これが純粹倫理における金銭の捉え方です。定期券を金銭そのものと捉えた場合、Mさんの体験は、その好例といえるでしょう。まるで、仕事を嫌がるMさんの心を、定期券が察知して、姿をくらましたかのような体験でした。

この事例が示す金銭の倫理は、「金銭を大切にしない人は金銭から見離される」ということです。

これ以外に、金銭を扱う上で大切な倫理として、次の三点を挙げることができます。

①金銭を本当に大切にすることは、正しい愛情をかけ、それを尊敬することである。

金銭を偏愛し「金の亡者」となることは、正しい愛情をかけることにはなりません。正しく愛情をかけるには、金銭の本質と意義を知り、それに沿って金銭を扱うことが求められます。

そこで、金銭の倫理の第二番目は次のようになります。

②金銭の本質は物その他の価値の象徴であり、流通させるところに、その意義がある。

正しい愛情を金銭に注ぐということは、自分のために金銭を生かして使うと共に、他の人の役に立つように流用することです。

だから、三番目に次のような金銭の倫理が成り立ちます。

③金儲けを第一にせず、社会のため、人のためを目標にして働くことを根本とする。

この事例において、Mさんが改善したのは、仕事への取り組み方でした。「社会のため」「人のため」どころか、不足不満一杯の心で仕事をしていたMさん。定期券紛失の一件は、あたかも、その間違いを指摘するような出来事だったと述懐しています。

金銭に関して、常ならざることが起こった場合、それは金銭の扱い方や心の向け方、もしくは、仕事そのものに対する注意を促す信号かもしれません。

先に示した「金銭の倫理」を一つの参考にして、お金との関係を見直してみたいかがでしょうか。

参考資料 丸山竹秋「金銭―その魔性と本質―」月刊『倫理』一九八九年四月号